

「人質の朗読会」

小川洋子(著)

中央公論新社 2011年2月25日刊

本書は現在最も構想力に富み、独創的な文学世界を作りだす小説家の一人である小川洋子氏の最新作である。

本書の構成は非常によく考えられている。地球の裏側にある国の遺跡観光帰りに日本人観光客8名が反政府ゲリラに拉致されて、人質となる。そして人質は、拉致から100日目を過ぎたころに軍と特殊警察の強行突入の巻き添えになって全員死亡してしまう。しかし、彼らが生きた証は盗聴目的で仕掛けられたテープに録音されていた人質の朗読会に残っており、それが2年後にラジオ放送されることで国民の知るところとなる。

朗読会は、いつになったら解放されるのかという未来ではなく、未来がどうあろうと決して損なわれない過去の思い出を取り出し、言葉にしたものであった。とりわけ、人質が生前に経験した死者との特別な関わりについて語ったものが多かった。それは死者をいたわる気持ちと同時に、その生を慈しみ感謝の気持ちを表したものだだった。

本書の構成は戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』を連想させるが、本書では戦争やテロの理不尽さについては一切触れられていない。

最終章は、朗読会を盗聴していた特殊部隊通信班の兵士の手によるものである。彼はその様子を、ハキリアリが葉っぱを切り取って巣に運んでゆく姿に例えて、「自らの体には明らかに余るものを掲げながら、苦心する素振りは微塵も見せず、むしろいえ平気です、どうぞご心配なく、とでもいうように進んでいく。余所見をしたり、自慢げにしたり、誰かを出し抜いたりしようとするものはいない。これが当然の役目であると皆がよく知っている」ものとして朗読会が開かれていたと証言している。

日本が大震災にあい、そこから立ち直ろうとするときに、各所で見せた譲り合いや協調の精神と本書で描かれている人々の姿は重なりあう。世界が再び殺戮の連鎖に入ろうかという時に、日本人は多くの困難に直面しても、淡々と日常生活を大切にして生きていくこと、他人を助けることはあっても、それを裁き、まして暴力を使うことなど決してないように。そういう祈りが本書からひしひしと感じられる。